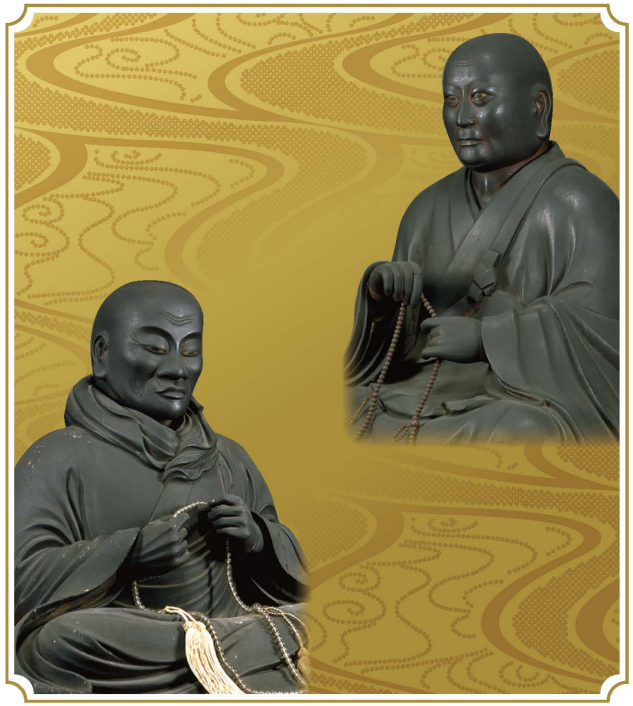
慶讃法会（きょうさんほうえ）

なおしはる 五

# 願いに生きる

本山佛光寺



親鸞聖人と法然上人（右上）

撮影：藤森 武

本山佛光寺

〒600-8084　京都市下京区新開町 397

Tel.075-341-3321 ／ Fax.075-341-3120

http://www.bukkoji.or.jp/


## 慶讃法会基本理念

## 大悲に生きる人とあう
## 願いに生きる人となる

2023年（令和5年）、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能（AI）をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出遇いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

先日、祖父の五十回忌を勤めさせていただきました。

## ◎ なんで救えないんや

祖父が亡くなったのは半世紀も前のことですから、いまとはちがって、家で看取るということが一般的でした。

日頃よりお世話になっているお医者さんが往診に来られ、家族、親戚みんなで見送ったことを、五十年経った今も鮮明に覚えています。

緊迫した空気のただよう中、当時小学生でおじいちゃん子だった私は、祖父が老い、病み、そして死んでゆくという現実を受け入れられず、ひとり本堂で「ナマンダブ、ナマンダブ、おじいちゃんを死なせないでください、ナマンダブ……」と一生懸命に拝んでいました。

思えば、お寺に生まれながらも自らすすんで、本堂にお参りすることなど、一度もなかった私です。

五分ほど経った頃でしょうか、母が私の横に座り、肩に手をかけて言いました。

「おじいちゃん、今、亡くなったよ……」

涙で目を真っ赤にした母の顔を見るなり、私は悲しみより怒りがこみ上げてきました。

「僕が、こんなに一生懸命拝んでお願いしてるのに……なんで！なんでこの仏さんは、おじいちゃんひとり救えないんや！」

## ◎ 目覚めてくれよ

時は流れ、私がかつて「おじいちゃんを死なせないで……」と手を合わせた本堂には、悩みをもった方、大切な人を亡くされた方々がお参りされ、五十年前は私のように子どもだった方や、まだ生まれていなかった若い方々もおられます。

親鸞聖人が、七高僧のお一人として讃えられた道綽禅師の言葉に「前に生ぜん者は後を導き、後に生ぜん者は、前を訪え」とあります。

私が祖父を思って申した「ナマンダブ」は時を超えて、命あるものは必ず死す、その私が量り知れない願いの中に生かされている厳粛な事実に目覚めてくれよと祖父から差し向けられた「ナマンダブ」となって響いてきます。

## ◎ 裏切ってまでも

あの時、私が祖父の延命をお願いして、一分一秒でも長生きしたとするならば、今なお自分に都合よく「ナマンダブ」と念仏申していたにちがいありません。

寸分たりとも私の都合に合わすことのない「ナマンダブ」は、私の願いを裏切ってまでも真実に目覚めさせるはたらきでありました。

それは、遠く親鸞聖人のご苦労であり、私たちのご先祖もまた、うれしいときだけでなく、辛いとき、悲しいときも念仏申し、そこに生きる意義を見出し生き抜かれました。

親鸞聖人が世に出られて八五〇年。

それは、人が人として生きる道をあきらかにされた歴史であります。

その願いをいただき、今の私がここにいます。